

氏 名：南條 裕子

学位の種類：博士（看護学）

学位記番号：甲第 205 号

学位授与年月日：2021 年 3 月 10 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論文審査委員：主査 奥 裕美（聖路加国際大学教授）

副査 林 直子（聖路加国際大学教授）

副査 吉田 俊子（聖路加国際大学教授）

副査 小見山 智恵子（東京大学医学部附属病院看護部長）

論文題目：急性期病院一般病棟における Early Warning System の実装に関する研究

博士論文審査結果

本研究は、研究者が所属する T 病院の一般病棟において、**Early Warning System (TEWS)** を導入し、患者の状態悪化に関連する看護実践の向上により、患者の重症化予防や、治療方針検討の機会を作ることを目指す実装研究である。実装方略として **QI** アプローチを用い、**TEWS** 導入の有無によるアウトカムを比較した。2020 年 6 月～9 月、看護師は **TEWS** スコア表を用いて対象の重症度を判定し、**TEWS** 対応表に従って行動した。なお、対象は胃・食道がんの診断で 1 週間以上入院した患者である。

88 名に **TEWS** を実施したところ、導入後の計画外の気管挿管・**ICU** 入室が 2 回あり、タイムリーな対応(**Rapid-Response System:RRS**)への要請は行われていなかった。一方、看護師が認識する患者の状態悪化に関連する実践の自立度と、不安・困難感の項目は、有意に得点の増加を示し、患者に関する情報共有量は 2 倍以上の増加を示した。実装方略については **QI** サイクルを繰り返すにつれ、報告の実施率や完遂率が増加傾向を示したが **RRS** 要請の実施率は増加しなかった。**TEWS** 対応表に対する満足度は導入 4 か月後に満足度の増加を示した一方、受容性は低値を維持した。

審査では、本研究が実践現場の課題の改善に向けた意欲に溢れている点、研究者が周囲の多くの協力を得て実施していた点において、臨床的意義が大きいと評価された。一方、誤字脱字や図表の形式を含め、全体を推敲することが求められた。結果については目的にあったデータを用いて分析を行うこと、データの解釈をさらに丁寧に行い記述することが求められた。考察は、目的との一貫性を保持したうえで、看護師が **TEWS** の実装の効果を実感し、その受容性を高めることができるのか、最終的に患者の状態悪化

に関連する看護実践力の向上のためには何が必要なかを総合的に検討し、加筆することなどが求められた。

以上について適切に修正が行われ、全審査委員が確認した。本研究は、急性期医療の現場に軸足を置く研究者が、管理者としての立場から、自部署のスタッフとともに行った、現実的で必要性の高い研究である。今後も実装方略を精練し QI サイクルを継続することにより、実効性の向上と患者ケアの質の向上が期待される。

以上により、本論文は、本学学位規程第 5 条に定める博士(看護学)の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。